◎東京だより（國民門外漢）

別欄に掲げたる首相の品川子談は、簡なれども要を得たり、首相は品川子の知己也、彼世間に知り渡りたる癇癪持の品川子も、首相に對しては、一言もなかりしを想へば、其知遇の感切なる亦知る可き也、尙ほ記者が知る所を下に記す

品川子が夫人の病氣看護に力を竭されたる一事は、殆んど今日の世間に、比類少かりしことと、自分が病人でありながら、其の死に瀕せる夫人に對して、遺情なき、周到、懇切なる好意を盡されたることは實に人倫の美事と云ふべし

或る金滿家曰く、投機、相庭等に關する事は、大隈伯に相談す可く、經濟問題に付ては、之を松方伯に諮ふ可し。然も殖林拓地の如き事は、品川子に詢るより善きはなしと。記者は今茲に其の鑑識の當、不當を論ずるの遑なし。但だ品川子が。如何に自個の懷中を肥さずして、國家の富を扶植することに熱心に。且つ其の熱心が他人に徹底したるかは、之によりて卜するに難からざる可し

平民文學に、先つ指を染めたるは、維新前後に於て、品川子も其の一人と云へば、彼の日本の國歌として、其の音譜か、歐州迄も知れ渡りたる、『宮さん、宮さん、御馬の前に、ヒラ〳〵するのは、ナンじやひな』の一齣は。實に品川子の吟出したるものにして、戊辰の戰史と與に、必傳の作と申しても、不可なかる可し。若し第二の國歌の作者の名譽を、拔刀隊歌の吟者たる、外山氏に與ふ可くんば、其の第一は、松陰先生の親愛なる弟子の一人に與へざる可らず候、勿々不一、

品川子爵長逝、實に國家の爲めに、此の一人物を喪ふたるを痛嘆せり、苟も幽室文稿を讀むものは、如何に吉田松陰先生が、彌二郎氏を愛親したるやを見る可く候、子が薩長聯合の大勢成るに際し、如何に周旋盡力したるかは、今更ら繰り返す迄もなく。其の熊本の文

内容見本
（80%縮小）

◉故品川子と康有爲（日本）

昨年の十月なりと覺ゆ、康有爲は米國より横濱に來り義俠なる日本國民の庇護に依らんと欲したるに、一度は康有爲等の雄志を嘉みし、其革新事業を扶助すへく見なたる我政府は、何の感ずる所やありけん、冷淡にも天涯の孤客たる康氏の上陸を拒み、そをしてむざむざ毒蛇の口に臨ましめんとしたりければ、不意を擊たれたる康氏は固より其同志の我國に在るものいたく打驚き、俄に大隈伯の許に馳け附け又は犬養氏の智惠をからんなど騷ぎ廻はりたれど、横濱出帆の時間は僅に二十時間のみなれば孰れも之を救ふの道に苦みける折柄豫て品川子の熱誠を耳にせる同志の留學生三名打揃ふて富士見町なる品川子の邸をたゝき緊急事件に付き御面會を得たき旨を申し出でけるに、子は快く面會を許しければ右の三氏は言葉せはしく康有爲

の急難に瀕するを陳べ之が救護を願ひけるが、子は忽ち彌二郎引請けたと大呼し憤然車を命じて某貴顯の許を訪ひ諄々として康有爲の上陸を許すべきを說きけるに、某貴顯は復たも彌二の御世話かと云はんばかりの面色にて、君は樞密院顧問官に候はずや、樞密顧問官は政治に容喙するの權限なしと言はせも果てず、品子は滿面朱を灑き怒髮竪立してづか〳〵と貴顯の前に進み雷霆の轟くが如くに樞密顧問官はなんだと連呼し、彌二は此處で樞密顧問官を辭して神戸に赴き、飽くまで康有爲を上陸せしむべきにより、康の上陸を拒まば先づ彌二を引ッくゝりて而る後ち爲せと言殘し席を蹴りてぞ歸りける、後に某貴顯も過言を悔ひ、且つ品川の肝癪破裂しなば、由々しき大事に及ぶべしとて閣員の誰彼に相談し、遂に康氏を神戸より上陸せしむることに決したるなりと云ふ至誠國を憂ふとは品川子の如き人をや云ふべき

品川彌二郎傳

付・『品川子爵追悼録』

奥谷松治―著

永らく待望「稀有の伝記」に加え、
「幻の追悼録」でよみがえる弥二の実像

◉限定三百部復刻

マツノ書店

内容見本
（原寸大）

品川彌二郎傳

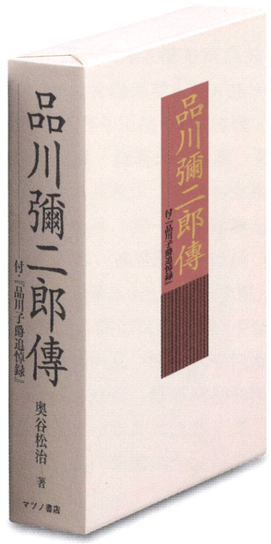
第一章　生ひ立ちと教養

一　生　家

品川彌二郎は諱を日孜、字を思父と稱し、扇洲、苦談樓、又念佛庵主と號した。一時橋本八郎の變名を用ひた事もあつた。天保十四年閏九月廿九日、長門國萩の東郊椿郷松本村字川端（現在萩市椿東區船津）に生れた。父は彌市右衞門、母は滿津（松子）と云つた。兄弟が數人あつたが、皆夭折したので彌二郎が何人目の子であるか明かでない。

家系　品川家は非常に舊い家柄であると云はれてゐる。「品川子爵傳」の著者村田峯次郎氏が、品川家に傳る系圖及び品川家の先祖が住んだ長門國阿武郡須佐村に傳る傳說について調査された結果品川家の來歷に就て次の如く述べられてゐる（村田峯次郎著「品川子爵傳」二二―二六頁）。

「品川氏の家系は、なか〳〵に古くして記すべきことも多かるべしとは聞つれど、今爰に遠祖の



復刻版の装幀です（デザイン／毛利一枝）

トコトンヤレ節の由來　征對大將軍宮が錦旗を高く揭げて出陣し、薩、長軍の士氣が大いに昂ると兵に、錦旗に因んだトコトンヤレ節が洛中洛外に流行した。この歌は品川がこれを作り、流行せしめたものであつた。歌の文句は有名であるが、特に意味の深い初めの二句をここに引用する。

一天萬乘のみかどに手向ひするやつを、トコトンヤレ、トンヤレナーねらひはづさず、どんどんうち出す薩長土、トコトンヤレトンヤレナ。

宮さま〳〵御馬の前のぴらぴらするのはなんじやいな、トコトンヤレ、トンヤレナー。

敵征伐せよとの錦の御旗じやしらないか、トコトンヤレトンヤレナ。

品川は、この歌を一般に流行させるためにも尠からざる苦心を拂つたと云ふことである。これに關して京都市の田中常太郎氏より若干の新しい史實を得たのでこゝに紹介する（田中常太郎氏の談話但し同氏の實見ではなく、同氏が父母から聞いた話である）。

「當時京都市中の有力な書店は、御所、薩摩、長州、會津、桑名等諸藩の出入先がそれぞれ決つて居り、幕末の頃になると出入先の關係により勤皇派と幕府派に二分されてゐた。四條通り御旅町に田中屋治兵衞（田中常太郎氏の父が主人）と云ふ書肆があり、東洞院二條上ルに支店を置いて相當盛大に營業してゐた。この書店の主なる出入先は、禁裡御用、西園寺公、長州藩、薩州藩であつた。品川が京都の薩摩屋敷に潛伏中、田中屋は商賣のため藩邸に出入し、品川の書面を受

▼今回は両書とも入手困難ですが、特に『品川子爵追悼録』は、専門の先生方も殆ど原本は持っておられない稀覯本。小社も偶然入手した、まさに古本屋ならではの特ダネ復刻です。
▼両書ともB6判の原本をA5版に拡大復刻いたします。

■体　裁
A5判上製函入　七二〇頁
■予約特価
一万二千円（税・〒共）
■定　価
一万四千円（税・〒別）
■特価締切
25年11月30日厳守
■発　売
26年1月中旬
▼書店不卸　▼返本ＯＫ

限定三百部
（番号入）

山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店
URL http://www.matuno.com

「品川弥二郎研究」の新境地を拓く

京都大学名誉教授
元京都学園大学学長
海原　徹

平成元（一九八九）年、マツノ書店から復刻された村田峯次郎『品川子爵伝』は、明治四三（一九一〇）年、品川没後十年を経て刊行された唯一の本格的な伝記であり、品川に少しでも興味や関心を抱く人ならば、誰もが一度は目にするいわば底本的な書物である。

著者村田は、長州藩の天保改革を主導した村田清風の孫として安政四（一八五七）年、萩城下に生れた。長じて藩校明倫館に学び、維新後は中央に出仕したが、ほどなく職を辞し毛利家に入り藩史編纂に従事した。品川とは早くから親交があり、その恩恵にあずかることも多々あった。その延長線上で彼は、品川を松門屈指の逸材、郷土の生んだ「最も偉大なる人物」として敬仰して止まなかった。伝記の執筆にあたり、品川の人となり、言行のすべてを肯定的にとらえ、プラス評価することに熱心であったのはそのためであり、内務大臣時代の悪名高い選挙干渉や最晩年の品川が悪戦苦闘した国民協会の活動についても、批判的な見方をあえて封印し、極めて抑制的な言辞に終始した。

一方、昭和一五（一九四〇）年に刊行された奥谷松治『品川弥二郎伝』は、すでにある村田と阿武の二書をベースにしながら、同時期までに世に出た品川に関するさまざまな文献史料を可能なかぎり収集して、その一つひとつに著者独自の意見や評価を加えることを基本としており、民党系の人びとから「国賊民敵品川弥二郎」と罵られ、また郷党の藩閥官僚からも一時孤立した政治家品川を取巻くマイナス的な環境にも目を逸らさず、毀誉褒貶さまざまな評価を踏まえながら、可能なかぎり冷静かつ客観的に見ようとした。

著者奥谷は、品川没後三年の明治三六（一九〇三）年に生まれた兵庫県の人。昭和五（一九三〇）年、東京共働社に入り消費組合運動に従事、戦後は生協運動をリードした昭和の社会運動家であり、出自、経歴いずれを見ても、維新の元勲品川とは何の接点もない。そうした彼がなぜ品川に興味をもち、その伝記作成を試みたのか、一見不思議な感がするが、たまたまこの頃、彼は『近代日本農政史論』（一九三八年）の研究に従事しており、おそらくこの分野での品川の先駆的な取り組み、功績の大なることを知り、改めて品川をより深く勉強してみようと思い立ったのではなかろうか。本書で、内務省地理局長時代の大規模な地質調査の実施、勧農局長として各地の開墾事業や酪農、農談会の組織、農商務省時代の各種産業団体の奨励、たとえば大日本農会や大日本水産会の立ち上げに多くの頁数を割き、そしてまた、内務大臣として「信用組合法案」の成立に苦心惨憺した経緯を詳細に叙述したのは、農政史や社会運動史の専門家奥谷ならではのものであり、随所に彼独自の新しい知見や評価が織り交ぜられ、きわめて説得力のあるものとなっている。

よく知られているように、明治三（一八七〇）年八月、品川は普仏戦争見学のためにヨーロッパに派遣された。もっとも、品川が興味を抱いたのは、新政府の期待する軍事研究ではなく、むしろ政治や社会、経済などの領域であり、帰国する同行の大山巌らと別れ、ただ一人留学生としてベルリンに残った。普仏戦争に勝利した新興ドイツ帝国のめざましい発展を見て、これに追いつき追い越すために、わが国は一体何をどのように学ぶべきかを改めて本格的に勉強しようとしたものである。

留学生からベルリン公使館付の外交官となった品川は、明治九（一八七六）年二月まで実に六年近い歳月、ドイツに滞在したが、この時代に見聞した鉄血宰相ビスマルクの「資本主義的自由主義派に対して、又後には社会主義運動に対して仮借なき弾圧」、「専断で、野蛮で、反動的で且つ、不法」なやり方を目の辺りにし、功罪ふくめて大いに学ぶところがあったもののようである。

周囲の人びとから、「初一念を徹す人」「直情径行の人なりき、其の所信を断行する場合には決して他と調停的の事をなすの余地を剰さざりき」といわれた品川生来の資質もあるが、かつてドイツで実見した文字ど

おり上からの政治が、帰国後の品川の出所進退に少なからぬ影響を及ぼしたことは、おそらく間違いない。全国各地に死傷者多数を出した選挙干渉はいうまでもなく、風俗取締りに熱心なあまり、「品川風の侵入」と揶揄された万事に強権発動的な手法も、こうした側面から見ると分かりやすい。いずれも本書の指摘である。

幕末維新の志士としての品川は、禁門の変で村塾の盟友久坂玄瑞らと鷹司邸に突入、幕長戦争時には京洛に潜み、木戸孝允（桂小五郎）が主導した薩長同盟の陰の演出者として活躍、鳥羽伏見の戦いに初めて登場、幕軍を驚かせた錦の御旗を密かに準備し、またこの頃、洛中洛外で流行った「トコトンヤレ節」の作者としても有名であるが、維新後の中央政界での活躍についてはあまり知られておらず、したがって、その評価もさほど高くない。

本書を読むと、そうしたこれまでの品川への見方がまったくの的外れ、認識不足であり、とりわけ殖産興業政策における品川の先見的な主張や数々の意欲的な取り組みが、明治国家の近代化にきわめて重要な役割を果たしたことを分かりやすく説明してくれる。

ところで、「伝記」に並べて復刻される阿武信一『品川子爵追悼録』は、奥谷本のあちこちで引用されているが、どのような内容のものか。以下にその大要を見てみよう。

編者阿武は、明治一五（一八八二）年、山口県阿武郡三見村（現・萩市）に生まれた。萩中学卒業後、海軍兵学校へ進み、日露戦争に従軍したエリート軍人であるが、病を得て退役、執筆や編集の世界をめざした。前歴を生かした軍事・冒険小説の分野でしだいに頭角を現わし、数多くの作品を発表した。阿武天風のペンネームで知られる『怒濤譚・海上生活』（一九二二年）や日米未来戦争を描いた『太陽は勝てり』（一九三〇年）などは、その代表作である。品川とは、「追悼録」の序がいうように、禁門の変で戦死した奇兵隊士の父が親しかった関係で幼時から面識があり、その謦咳に接する機会もしばしばあったらしい。

「追悼録」は、明治三三（一九〇〇）年二月中旬、品川の重篤を知った阿武がすぐに稿を起したもので、「言行彙聞」「痛惜評論」「蓋棺始末」「弔詞哀誄」「傷悼歌詩」の五部で編まれている。四月五日、京都霊山で行われた納骨、法会の日に完稿、六月六日に刊行された。品川没後、実に三カ月余という異例の早さで世に出た本である。

故人の想い出や遺徳を偲ぶ「追悼録」の性格上、至る所に美辞麗句が並ぶのは止むを得ないが、本書の特色は、編者の阿武が、自身の意見や評価を主にしたものでなく、全編、この時点で世に出た品川に関する文章や評論の類いをそのまま、何の脚色も加えず収録したところにある。それゆえ、なかには新聞『日本』の「藩閥の為に損せり」のように、品川のいわゆる「長州の三尊」を、「伊藤侯は俗吏の長上、山県侯は軍吏の長上、而して井上伯は博徒の親分」と一蹴しながら、「氏は元と公誠摯実、謂ゆる政治家より一層高等の人物、政治に盡すよりも杜会に盡す方遥かに適当せしなるに藩閥に生まれて藩閥と与に倶せし為め労苦して而して毎に失敗を免れざりき」などという、要するに、享年五八歳で没した政治家品川の生涯を失敗の連続であったとする、一見辛口の冷めた見方も収録されており、なかなか読み応えがある興味駸々の本となっている。

復刻されたこれら二書を併せ読むことで、われわれの前に、「品川弥二郎研究」に関するまた新しい地平が拓け、従前の品川観が大きく改められることは、おそらく間違いない。

品川弥二郎伝 目次

第一章 生ひ立ちと教養
①生家　②修学
第二章　維新大業の翼賛
①御楯組　②御楯隊　③薩長同盟の連鎖　④錦の御旗　⑤脱隊騒動
第三章　外 遊
①普仏戦争の見学　②独逸留学　③外交官
第四章　内務省時代
①萩の乱　②西南戦争　③内治政策の転換
第五章　農商務省時代
①農商務省の設置　②産業団体の奨励　③共同運輸会社の頽末　④補遺
第六章 独逸駐在特命全権公使
①病気静養　②赴任と病気帰朝
第七章　宮中顧問官
①病気静養と邸宅及農場 ②枢密顧問官 ③御料局長
④山縣有朋の政治的活動と品川との関係
第八章　内務大臣
①就任事情　②信用組合法案　③選挙干渉
第九章 在野時代
①国民協会　②信用組合の設立奨励　③補遺
第十章　終 焉
①夫人の逝去　②薨去　③蓋棺始末　④没後余事
付録　品川弥二郎年譜

計380頁

品川子爵追悼録 目次

■言行彙聞
苦談楼逸事　故品川子爵と水戸　品川弥二郎君　平田法制局長官・品川子と信用組合法 品川子逸事 山縣侯の品川子談　野村靖子・品川子の人物　佐々友房君・品川子との関係　橋本峨山禅師・品川子の奉仏　河瀬真孝・品川子最後の登院　川島甚兵衛君・品川子と西陣織物　仏國土産の菓子一函　品川子の大喝録　品川子爵逸話　品川子と康有為　品川子最後の談片
■痛惜評論（原本にはほとんど筆者名掲載）
藩閥の爲に損せり　嗚呼品川子爵　送故品川子之柩品川子を悼む　品川子の訃音　品川先生の長逝を悲しむ　哭品川先生　嗚呼品川子爵　葬故品川正二位　特色ある人物　天下復た此人なし　品川子薨去に就き得富社主の書　品川先生の書束　品川子爵を悼む
■蓋棺始末
品川子の病気　品川子爵薨す　子爵任官略歴　弔問者　遺骸納棺　仏前哀語　聖恩優渥　勅使来邸　葬儀彙聞　故品川子葬儀　遺骸の火葬　埋葬誌
■弔詞哀誄　■傷悼歌詩

計330頁